

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟 選

西村 和子 選

井上 康明 選

片山由美子 選

春浅しオープンカフェの客は鳩

奈良市 中島 和夫

△評▽まだ寒いのか、舗道に並べた席には座る人もなくハトがうつろつだけ。ユーモラスに描かれた都会のスケッチだ。

うららかな噴水前の弁当屋

東京 徳原 伸吉

△評▽陽気に誘われて、子供連れの母親も、近くのオフィスで働く人も列に並んでいる。

春愁の部屋を埋めゆく雨の音

松山市 越智 大地

雀来る護岸に春の日のひかり

枚方市 森田美佐江

夕東風や日の落ちかかる棚田みち

豊橋市 岡野寛十郎

学園は心の寄るへ青き踏む

伊賀市 福沢 義男

いつもより姉の静かな雛祭

我孫子市 矢澤 準二

自転車と書籍譲りて卒業す

さいたま市 齊藤 真人

つちふるや広場のピエロ瞬かす

京都市 根来美知代

鳥帰る遠山に雲濃く淡く

高砂市 宮田 悦子

駅を出てすぐに肩馬春まつり

和歌山 神野 一馬

△評▽春まつりのにぎわいが駅に迫っていることや、肩車を喜ぶ子供の背丈や年齢が想像される。スカートをつまみ飛石春の川

東久留米市 夏目あたる

△評▽スカートをつまむ女の子のしぐさ、飛び石を渡る弾み、流れのきらめきが見えてくる。淡雪や良薬包むオブラート

東京 榎並しんさ

菜の花と同じ背丈や一年生

秦野市 林 ち島

雪残る名峰にとり囲まるる

羽生市 小菅 純一

日差し戻りて菜の花の唄ひ出す

神奈川 中島やさか

仏滅を気にせぬ婚儀つばめ来る

志木市 谷村 康志

春耕や狼煙のごときエンジン音

山形 佐藤美和緒

一輪の梅で足りたる机上かな

大阪市 福永 都女

永き日や表紙はづれし辞書めくる

立川市 大西 信子

四十年続けし日記返返る

平塚市 日下 光代

△評▽喜びも悲しみも、日記にはすべてが書かれているのだらう。寒さがふり返る今日も日記を書くと、簡潔に3行ほど。

縁側の足踏みミシン桃の花

和歌山 中筋 のぶ子

△評▽農家の縁側に置かれたミシン。桃の花が咲いて、家の人は農作業に追われる、回想の風景。正面に落日の海春の風

山形 佐藤美和緒

童天に登りあはうみ茫洋と

長浜市 中島 正則

水静か卵の中に蝌蚪うごき

小平市 中澤 清

田に空が映りて蝌蚪の生まれけり

小林市 黒木 暢

富士山へ夕日入るたる紫木蓮

平塚市 小林 耕平

介護車の行き交ふ団地鳥雲に

川崎市 益子さとし

初蝶や次いで二の蝶三の蝶

富士市 後藤 秋臣

卒業やネコの額のグラウンド

町田市 岡 良

囀や確かに言葉あるらしき

西宮市 吉田 晶子

△評▽メジロは鳴き声によって情報を伝達するといふが、さえずりに耳を傾けていると、いろいろな言葉のように聞こえてくる。花ミモザ使はぬままの銀食器

伊賀市 菅山 勇二

△評▽未使用の銀食器が輝きを保っているのだらう。ミモザの花の金色との対比が美しい。流水が去りて戻りし海の色

札幌市 清水 志

嫁がせてあれから二年花林檎

京都市 古川麻美子

雛祭娘は疾うに四十過ぎ

神戸市 大田 雅一

草なびく平城宮址落雲金

尼崎市 森下久美子

花菜風スキップで来る女の子

水戸市 永井 弘子

春風や遅れがちなバスを待ち

平塚市 高橋 佳代

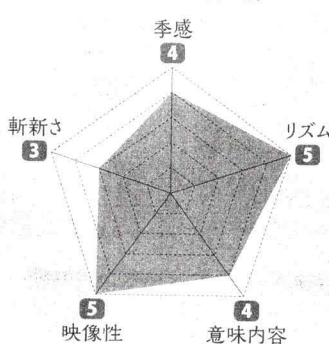
蓬摘む土手ゆく柔道部員かな

浜松市 久野 茂樹

菜の花や浅瀬に鯉のかたまれる

羽生市 柴崎加代子

チャートで採点



啓蟄や乳歯二本の離乳食

すいれんなお

俳句てふてふ

円堂実花

季語「啓蟄」の一句。二十四節気のひとつで、新暦の3月5日ごろにあたります。暖かくなり、冬眠していたアリ・地虫・蛇・カエルなどが巣穴から出てくるころとされ、同じころの季語に「蛇穴を出つ」や「地虫穴を出つ」があります。
掲句は「啓蟄」を兼題とした「てふてふ句会」に投句され、一席を獲得しました。天地が春の躍動を示し始めた喜びと活気をあらわす季語なので、子の成長と取り合わせた句はこれまでも詠まれています。が、「乳歯二本」で子のおおまかな月齢を伝えるところが作者の工夫でしょう。始めたばかりか、もしかすると初めての離乳食を口にする子。窓から差し込む春の光も感じられます。
(えんどう・みか俳人)

アプリ

俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト 俳句てふてふは富士五湖や耶馬溪など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930(昭和5)年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。



アプリのダウンロードはこちら